

ZEN 47号 2012.8
発行・編集 全道美術協会事務局
梅津蕙方 Tel. (0126)24-1975
〒068-0835 岩見沢市緑が丘4丁目221
印刷 株式会社 アイワード

● あの日あの時 第13回

思い出すままに

小関 恵久子

私が初めて絵を公募展に出したのは、終戦時、父が増毛から転勤した先の紋別からで、そのきっかけは、村瀬真治先生に油絵をお見せすることになってからだった。その頃、父母の郷里の仙台で、当時、独立美術の林武に師事されていた土橋先生の内弟子として来る日も来る日も、コップなどのデッサンを繰り返して練習したり、又武蔵野美術学校を受験するために上京しましたが、そのたびに母が病気で家にもどらざるを得ませんでした。そんな時にやっとの思いで始めたばかりの油絵でした。

村瀬先生は「このままでいいから札幌（北海道展）の展覧会に出しましょう」とおっしゃり、出品、入選とな

りました。道展の懇親会では円山小学校で担任だった新妻清先生も「やはり小関だったか」と大層喜んでくださり、とても嬉しい再会となりました。

翌年また転居先の苫小牧では遠藤未満先生はじめ、全道展の先輩方と親しくして頂きましたが、私の方が病院の入退院の繰り返しとなり、その間、武蔵野美術学校は通信教育にして、入院中、西洋文化史概論等をおもしろく勉強できたものの、全道展に出品できたのは、31年になりました。その頃は道展と全道展の違いにやっとな気がしましたが、しばらくして村瀬先生は「良い絵が描ければどちらでもよいから」といわれました。

住所も札幌になり、新たな気持ちでデッサン会に通いはじめ、全道展の方々、特に坂原チエさんと親しくなり、いろいろと会のこと伺い、優秀な人も多いことを知りました。そのうち賞も頂きながら、やっとな会友になる一方、新女流作家集団に加えていただき、またその頃、野口恵久子となり、歌志内で母を亡くした三人の子供の母親にもなりました。皆よい子で、そのような生活に慣れた頃、自由美術の会員となりました。でも、体調が



思わしくなく8年でまた、札幌に戻ることになりました。

その頃は竹岡羊子さん、安田郁子さん、佐久間恭子さんたちにお世話になりながらも何十年も前の事で、思い出も前後ですが、時計台画廊は当時1階はギャラリーで、2階の広間に敷物を敷き、忘年会を開き全道展の方々が集まって、お酒、おつまみでの芸術論です。本田さんのロシア民謡のバリトンを聞くのもたのしみでした。大本先生も「もう少し思い切って描け」と助言して下さいたり、当時、荒巻芳（今の社長のお父様）様に、私も親しくして頂き、下の画廊では自由美術の沢田哲夫さんや先輩方のお話し合いの中から、地球の裏側の自然や絵のお話も伺ったり、徐々に描く面白さも重ね、自分の表現方法はこれだと自信を見つけた喜びから、初めての個展を開きました。でも個展をするマナーにも欠け、「なかなか良い」と言われたのは栃内先生と、たまさか訪れたアメリカ人の二人連れぐらいだったようです。私のこれだ！と思ったものは伝わらなかったと自信を失いました。

その後、乳ガンでも入院、当時児童絵画教室も幾つかしておりましたが、手術後は全く病院に行かず、そのうち一寸したチャンスから海外旅行に出かけはじめました。パリではリベリヤホテルの渡會さんや渋谷さん、更に蛸子さんご夫妻には大変お世話になったり、インドやカッパドキアを目指してトルコに独りで、さらにエジプトにまで出かけました。そのたびに幸運にも色々な方に助けられ収穫を得ることができました。そんなことで時間をかけてやっと全道展会員になりましたが、20年以上の自由美術は退会しました。

そのまま、全道展だけとっていたところ、原義行先生から行動展へのお誘いを受け、入選が3年ほど続きましたが、抽象の大作が多く、母と二人の生活では続けられないと思い、全道展だけに絞りました。母も90歳を過ぎて、車いすの生活となり、家等のトラブルに手が回りきれず、絵はこれまでと、その前に作品をまとめて個展と図録作成を企画したのですが、途中で倒れ、それでも川本夫妻、福島会員に助けられながら、ご迷惑をかけながらも何とか出来ました。その後、私がホームに入所中に名古屋の妹は、母を名古屋に連れて行き、私は我が家に戻り、家のリフォームを重ね、古アパートの始末にも大変な中での制作でした。体調も思わしくなくても絵は続けたく、描ける余裕のある賃貸ケアハウスがあると聞き、移転しました。

話は前後しますが、私が全道展の会員になって編集の仕事伊藤倭子さんとすることになり、二人とも初めてのことでしたが岸本さんに教えて頂きました。また藤井正会計部長の補佐もさせていただきましたが、当時後藤庸也さんが全道展事務局長の時、韓国との文化交流の手

始めとして、道から92点の作品を送り、私もソウルに旅行に出かけ、美術館等も観ることができました。渦巻状の美しい美術館、その付設館で日韓交流パーティーも盛り上がり、日本からの私達女性は時計台の歌を合唱したりで楽しい交流になりました。翌年は韓国の作家の招待美術展が北海道近代美術館で開催されました。また藤井正さんが米国横断し、丸井でしたか、展覧会を開きましたが、その後体調を崩され、入院。私も幾度か北広島に見舞いに行ったものでした。急変して亡くなられ、ショックでしたが、今はそのご息の高志さんがご活躍されて、新しい全道展の大きな力になられています。

母を亡くして独りになった私は今、絵に支えられている感じで、若い人の中には公募展無用論も聞かれますが、私にとっては通信教育だけでは補えない部分は、大先輩たちの講話や座談会も含め、勉強の場であり、また先輩仲間同士からの刺激や友情等もあり、私の人生の中での良き思い出になっています。

昨年全道展初日に自分の作品がどう見えるのか気になって出かけましたら、私の作品の前で3人の女性が立っていて、お一人が「この人の絵は優しく、温かくて好きな、去年は…その前は…」とお話されているのを聞いて、ネガティブな私には想像も出来ないほど積極的になって「それ、わたしのです。ありがとう。」と言っていました。

生と死の関心、ぬくもり…。

私が一番求めているものが表現出来たら、相手にもその思いが伝わる。だがそう簡単にはゆかず勉強不足ながら、私なりにクリエートする喜びもあり先輩や仲間からも勉強でき、このすばらしい地球に人として生かされていることに感謝しつつ、キャンパスの前に立ちます。



第67回 全道展審査を終えて



6月7日～8日の2日間にわたり行なわれた審査。4部門で一般応募総数613点。内28点が入賞、235点が入選となりました。各部門の審査委員長より感想を頂きました。

総合審査委員長
絵画部門審査委員長

渡 辺 貞 之

会員自らに課した決断

絵を描くとき、何をどこから始めるか、そしてどこでその結末をつけるかということは作家にとって宿命的な問題です。しかも心の中にあるものを一旦、吐き出してしまいたいと思うと、そうしないではいられない衝動にかられます。しかし、その吐き出すものが、どんなものなのかはよくわかりません。終末につれて何となく出せたとか出せなかったとか、わかるだけ。そう考えると自分の求めているものの実態は、本来漠然としたものなのだと思います。

今年は「協会賞」該当作品はなし。これは全道展の歴史の中で1973年第28回展以来、39年ぶりのできごとです。審査では激しい論戦が展開しました。候補になっている作品が協会賞として相応しいのかどうか、推薦する人もしない人も、決定的な意見が出ないまま論争が続きました。それは審査する作家に共通する明解な美の論理自体がなかったからなのでしょう。審査する作家それぞれが抱く美の本性は、本来求めるものであって、作家自身も確固たる結論は持ち得ていないものなのだと思います。ですから、一枚の絵を前にしたとき、漠然とした自己の美意識をよりどころに感覚的な言語で語り、自分自身も内心苛立ちながら説得しようとすることに無理があったのかもしれませんが。

ある会員がいました。「この作品が駄目だというなら、駄目だという理由を言え」と。しかし、それに答える明解な意見はありませんでしたし、逆にその作品がいいという理由も漠然として理解できないままでした。

考えてみれば「協会賞とは何か」そういう論議は今ま

でありましてこなかった。出すのが当たり前、その年の最高と思われる作品が当然協会賞だという空気が審査する会員の脳裏に漠然とあっただけなのです。今回のように改めて協会賞というものを論議したとき、審査する会員相互の考えに大きな差異があることに気づきました。今、全道展は一つの岐路に立たされています。この数年、全道展を支えてくれた先輩諸氏が高齢によって筆を断ち、さらに逝去されていきました。あるべき作家の作品がないということは、長年慣れ親しんできた全道展の会場がいかにも寂しくなった…。しみじみとした想いにかられます。

そんな想いの中で考えてみると、全道展の創立以来の精神も、いつの間にか時代の流れの中で変容していったことに気づきます。かつて「全道展は厳しい会だ」という風潮がありました。それは審査だけではなく、会員の作品の質にもあらわれていました。あの頃、すばらしい先輩会員の作品に魅せられて、応募する若者の一人が私でもありました。

「全道展は、良い作品を賞賛するだけではない。良い作家を見つけだし育てるのだ。そのためには単に作品の入選、受賞を選出するのではない。厳しい作家の精神性を問わなければならない」

これからの全道展の方向性が、審査の前に確認されました。そのためか、厳しい審査の眼だけが先行したように思えます。そして、多数の審査員が協会賞該当作品なしと決断しました。その結果が正しかったのかどうか、私は今でもあの候補作品の前に立ったとき迷う心があります。ただ、あの時の判断は決して軽はずみのものではなかった。一種の悲壮感さえ感じる決断だったと思います。それは厳しく選ぶ側の立場からだけではなく、審査した会員自身が自らの姿勢、作品に厳しさを課したことになるのです。

これからの全道展、そして会員諸氏の作家としての姿勢、さらに精神性の高揚と確立を期待します。

版画部門審査委員長

福岡幸一

版画の審査を終えて

緊張の中、2012年版画の審査が始まった。最近は図録の作成のスケジュールのため会友の審査から始まる。

今年はどうな作品が楽しみである。作品が机の上に並べられたが、ちょっと気になったのは一点作家が多いことであった。あとで調べてみると21人中6人が一点であった。いろんな事情はあるのかも知れないが一点では評価がしにくい、今後の頑張りには期待したい。審査はひとり一人丹念に行われた。一点ずつが選ばれた。一般の審査も引き続き行われた。ここで気が付いたのは、作風がイラスト的であったりマンガ的なのが多い。時代の反映なのかも知れないが物足りなさを感じる。また、複数出品が目立ったことはあまりにも1点1点の傾向が違い、何を指して創ってるか解らない人が多く、同じ事が会友の中にもあり残念だ。

審査は一般の受賞、会友推薦、会友賞、会員推挙の、それぞれの候補を選び総合審査にのぞんだ。

佳作賞「山の旋律」の武田志摩さんの作品は細長い画面に山の樹や畑が幾何学的な模様のように配置され、緑と黒のハーモニーでのどかな田園風景が伝わって来る。

佳作賞「ころ柿」の田中文夫さんの作品はころ柿がリズムカルに配置されバックの黒と心地よい響きである。

新会友、浅川良美さんの「大衆食堂」はカメレオンの頭部が強調されると作品が引き締まる。坂みち代さんの2人はコンスタントな力量が評価された。

新会員、阿南ゆう子さんの「イシャイラズ」は対象物の背景の螺旋線がバランスをうまく保って心地よさを感じる作品になった。

私達にも言えるのだが、マンネリにならず常に新境地への挑戦を期待する。



彫刻部門審査委員長

伊藤寿朗

総評

今年の審査は東京（黒田）神奈川（橋本）の会員を始め、道内の遠隔地より駆けつけた18人で始まりました。

会員が増えた分、厳選となりました。多くの会員を説得できる作品はなかなか出てこない状態です。作品に完成度が厳しく問われたと言えます。

そういう意味では初出品者には厳しいものになりました。

堅実に長年作り続けた作家が会友に4名推薦され、協会賞・道新賞も該当者が出なかったことは、これからもさらに完成度や緻密さが要求されることが示された気がします。

さて、67回展の彫刻は充実した内容の作品が多数出品されました。圧倒される程でした。一般・会友共に力作に恵まれ、特に会友の勢いと熱気を感じました。今後が大いに楽しみです、嬉しい限りです。

全道展で新しい流れを形作って来ていた学生達の制作環境が変化していて、20代前半の出品者が減少しているのが気がかりです。

昨年まで続けて出品していて、今年もと楽しみにしていた作家が不出品であると、息切れしたのかな？制作環境の変化や体調まで気になってしまいます。

自分を見つめ直し、古い殻を脱ぎ捨てて飛躍を期して下さい。



工芸部門審査委員長

三浦 總 造

工芸の審査を終えて

今年も工芸の多くの分野からの出品を嬉しく思う。

新しい素材や技法の出品もあり、審査する立場での更なる研究心に今年も火が付いた。

それぞれの作家が持つ技術を尽くし、丁寧に繊細で、かつ大胆に楽しく制作している様子が作品の中に垣間見られる。

複数出品により、作者の多くの挑戦を知ることができ、次を楽しみに感じた。

力のある人々からの出品が多いと感じるが、今回は前回に比べ力を出し切れていないと感じる物や、欲張り過ぎていると感じる作品もあり、勿体なく残念に思う。

作品は大きくすることで迫力が出る、しかし一つ間違えると間延びし、だらしない物になる危険性も持っている。たった一本の線が作品に緊張感を与え、出来の良し悪しを決める喜びと恐ろしさも改めて感じた。

陶器は「火」という人間には管理しきれない時を経て作品になるが、形と釉薬、そして時間と上手に付き合い、作者の思いがさらに伝わる作品となることを期待する。

織物はデザインの緻密さと大胆さ、シンメトリーとアシンメトリー、あらゆるバランスについて考えた作品と

なることを期待する。

ガラスは小さな衝撃で「無」になる危険を含んでいるが、その危うさと隣り合った美しさに魅了されていると感じた。

金属は冷たい色だが、形に優しさを感じた。

工芸の「用と美」だけに留まらない全道展の作品は、様々な美しさと楽しさを持っている。

多くの物を見、許される限り触れ、自身の力とし、次の作品に表現されることを期待する。

いつか出品された全員の作品を陳列したいと言いたくなる日が来ることを願っている。

作品は制作中に掛けた手数を裏切らない！



受賞のよろこび



受賞者喜びの笑顔で！〈6月16日(土)全日空ホテル〉

絵画（北海道新聞社賞）梅木美呂（札幌）

この様な大きな賞を頂けるとは思ってもおらず、とても驚きました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからも初心を忘れず、傲らず、描き続けていきたいと思えます。この賞は、私だけの賞ではなく、日々支えてくださった方々の賞だとも思っています。本当に、ありがとうございました。

子どもと私

絵画（佳作賞）岩永総子（旭川）

このたびは、佳作賞をいただき、天にもものぼるような気持ちです！本当にありがとうございました。

私はいつも、イメージした通りの画面が作れず、描いていくうちに当初の予定からどんどん変わってしまいます。けれどその前は、何を描いて良いのかすら分かりませんでした。子どもができて、やっと描きたいものに巡り会え、彼等が見せてくれる世界を大切にしたいと思っています。

版画（佳作賞）武田志麻（赤井川）

全道展とのご縁は、幼少の頃から我が家にあった北浦晃先生の油絵の存在を通じて、生まれ引き寄せられたように思います。

第67回全道展に出品することが叶い、審査結果に多く

を学べた今回は、公募展に対する姿勢を問い正してくれるものとなりました。

木版画は楽しい仕事で生き甲斐そのものです。版画がもたらしてくれる縁を大切に、これからも挑戦し続けていこうと気持ち新たにしました次第です。ありがとうございました。

彫刻（佳作賞）森戸春樹（帯広）

感懐、追悼を拝読して、20代に展覧会を共にし、目標とした作家を偲びました。又、出品を続けていた30代当時の受賞、入選作品を見返すと、刺激を受け競争心を掻き立てた作家が次々と浮かんできます。復帰して3年目の今展覧会場には、その才能溢れた作品には出会えませんでした。創作を断念したのだろうか。中央展へ発表の場を移したのだろうか。はたまた雌伏の秋を過ごしているのだろうか。多くの才能が埋もれるのは残念です。

小生は全道展に発表できる「今」を大切に鑄と槌を振っていこうと思います。

還暦からの出発

工芸（佳作賞）阿部 榮（札幌）

この度は、佳作賞をいただき本当に驚きと嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいです。60才からの出品でしたが、毎年6月が私の人生の生き甲斐となりました。出品する意欲を持つことができましたのは彫刻家、國松明日香先



絵画（奨励賞） 池田 宣 弘（札幌）

好きな絵を好きで描いている訳ですから出来る事なら楽しみながら描きたいですが、多分一生かかっても無理でしょう。正にこの度の作品は制作半ばで行き詰り、フォームはそのままに色を単色で全部塗りつぶし改めて手直した次第でした。その様な作品でこの度、奨励賞を賜わり感謝と共に表彰式当日は特別な思いがございました。これからも全道展に出品させて頂き、全道展を通して少しずつでも自らが成長して行ける様願っております。

絵画（奨励賞） 小笠原 弘 子（札幌）

私の絵のテーマは、自然との対話です。緑陰に入りて眼底青むまで。このような自作の句や詩をもとに制作に入り込み目に映らないものを追求し見つめていくうち、いつの間にか自分が作品に見つめ返されている様な感覚になっていく。そう言った事を行き来しながら作品にしていく難しき、又美は簡単に創造出来たりするものではない事をひしと感じる事になる。この度の受賞に感謝すると共にさらなる修練を積んでいきたいと思ひます。ありがとうございました。

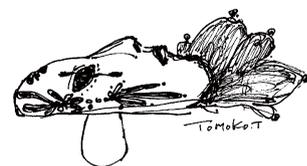
版画（奨励賞） 高 崎 勝 司（恵庭）

アルミはダメとの先輩の声より安さに惹かれ、なんとかなるはずと取組んだアルミ版です。失敗の連続、今さら引くに引けず人にも聞けず、誰もやらないアーク溶接での版作りも笑われる始末…。今回はあきらめ切れずに残しておいた第1作目の版に手を加えた作品です。足かけ12、3年。

芸森の版画工房で習いました。最近また古巣の版画工房に通い制作しています。今回の作品は中途半端な表現ですが、今までの失敗と多くの人との出会いが詰って私にとっての宝物となりました。ありがとうございました。

工芸（奨励賞） 阿 部 綾 子（千葉）

〈初めての全道展〉奨励賞を頂き、ありがとうございます。会員の先生方、先輩の皆様方に、感謝申し上げます。主人の仕事の関係で現在は千葉におります。夫婦共々札幌出身で、北海道への想いは年々強まるばかり。そのような気持ちもあり、北海道の公募展を検索。全道展のホームページの写真や文面から何かパワーを感じ、迷うことなく出品を。初めて目の当たりにした全道展は、囚われず、自由で、おおらか。私も自由でいたつもりですが、まだまだ足りない。また来年に向け身の引き締まる思いです。



生との出会いがなければありえませんでしたし、この素晴らしい世界を知ることもなかったと思ひます。還暦からの出発ですが、これからも毎年の出品を目標として頑張つてゆきたいと思ひますのでどうぞ宜しくお願い致します。本当にありがとうございました。

絵画（佳作賞） 松 田 悦 子（函館）

この度は佳作賞を頂きましてありがとうございます。全道展には、6回目の出展になります。初出展の時に佳作賞を頂き、今年2度目の佳作賞を頂きまして大変嬉しく思ひます。この賞を励みに又、これからも頑張りたいと思ひます。色々な事に挑戦したり、先輩や仲間から刺激を受けたり、迷いながらも少しでも良い、自分らしい作品を描いていきたいと思ひております。これからも御指導よろしくお願ひ致します。ありがとうございました。

版画（佳作賞） 田 中 文 夫（札幌）

次なる目標は老後の趣味作りのため版画教室に通つて9年目に入った。はじめの目標は教室のグループ展のGEM展に出品することで、しんどい事を始めてしまったものだと思つた。5年目から全道展に出品し入選することを目指した。今回は佳作賞の受賞という思いがけない事が起きました。しかしこれは大問題で、受賞作は自分の本命ではなく大穴であり、大穴を続けて当てる事は至難の業です。さて来年はどうしたものか、次なる目標に向けて悩みはつきません。まずは師の教えに従ひ、面白い絵を描くことから始めよう。

絵画（佳作賞）・新会友 大久保 恵美子（札幌）

この度、会友に導いて下さりました諸先生方々にお礼申し上げます。ありがとうございます。私が絵画教室に入りました時会友の方が一人おられました、憧れと尊敬の気持ちだけで遠い存在でした。最初4回連続落選して落胆してしまいましたが止めようとは思ひませんでした。5回目にして初入選の通知を受けた時は1日中バンザイ、バンザイ、バンザイと叫んでいました。あの時の感動を忘れること無く、これからも精進して行きたいと思ひます。

工芸(奨励賞) 中村光一(小樽)

今回の受賞を励みに、より一層よいものを自分らしく表現していきたいと思ひます。

絵画(奨励賞) 竹生洋子(札幌)

この度は奨励賞をいただきまして、ありがとうございました。この3年前の作品作りで、「記憶のひと」に取り組んでおり、久しぶりの個展も5月に終える事が出来ました。これからもこのテーマで作品制作に精進してまいりますので、今後とも変らぬご指導のほど、ここからお願い申し上げます。ありがとうございました。

忘れていた約束

絵画(奨励賞) 松井年恵(旭川)

全道展の会場で携帯がなり「今、会場に来たの」と昔いっしょに絵を習っていた友人からの連絡。迎えに行くと笑顔の友人とその後に大きな花束を抱えた女の子が「おめでとうございませす」小さな声で花束をくれた。女の子は友人の孫でした。「あなたが賞を貰ったら、花束を持ってかけつけると言ったでしょ」「??」実現しない約束は私の頭の中に無く、すっかり忘れていた。心のこもったサプライズに目頭もあつくなり、最初何にも描けず筆を持って教室を友人と二人ぶらついていた事を思い出す。先生有り難うございました。

絵画(奨励賞) 三浦一孝(札幌)

全道展に出品するのは2回目ですが、思いもしない奨励賞を頂き、大変嬉しく思っております。「朽ちる」のテーマは、かつての活動を思い浮かべ、朽ちゆく姿にその歴史を感じ、その存在感・朽ちゆく美の表現ですが、もっと表現できないかと試行錯誤しています。

今回の賞を励みとして、表現する喜びを実感すると共に、更に努力していきたいと思っております。

すばらしい賞をありがとうございました。

絵画(奨励賞) 山田勝代(苫小牧)

この度、奨励賞を与えて下さいました諸先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。家族に良い絵を描いて出品をしなければダメだ。毎年言われてきました。昨年、思いきって変えてみました。今年賞をいただき、嬉しく思っています。これからも一生懸命努力を続けて創作していきたいと思ひます。

絵画・新会友 梅津美香(帯広)

今回の作品「あれからのこと」は、昨年協会賞をいただいてからのこと、という内容です。半年程をかけて、その都度少しずつ描き進めてきました。日記を綴る様に描きました。私の描く絵は毎回夜です。そして闇です。夜は次の朝の前の時間であり、闇の中にはまだまだ探り

だしたいものたちが沢山ひそんでいます。描きたいものがつまっている空間です。会友という場を与えていただき大変感謝しています。まだまだ出会えるものたちも描ける作品もいっぱいあります。頂いた場に描く喜びが表れる作品を発表し続ける様、努めます。

新会友の推薦をいただいて

絵画・新会友 菊池喜美代(伊達)

この度、新会友のご推薦頂きまして誠に有難うございました。その後、時間が経つにつれて、その立場の重さに嬉しくもあり、責任も感じております。この機をお与えくださった諸先生、今まで私を支えてくださった方々に感謝とお礼を申し上げます。初入選以来20年、色々な事が脳裏を横切ります。初出品から続いて7回落選、入選してからも賞にはほど遠く、悶々とした中で己れを励ましておりました。これを機に私の今のテーマをより深め、自分なりに創作を続けて参りたいと思ひますので、これからもご指導よろしくお願ひ致します。本当に有難うございました。

会友になって

絵画・新会友 さとう えみこ(芽室)

13年前初入選した時、自分が会友になれるなんて夢にも思いませんでした。すべてに圧倒されたあの時。作品にも個性豊かな方々にも、ずっと憧れてました。そして、今、推薦していただき、心から感謝し改めて「色」を追いかけます。深く、広く、時には軽やかに、時にはせつない色を探し求めます。冬に、尊敬する先生が、遠くへ行ってしまうされました。残して下さった心を胸にあたためて、会友としての一步を踏み出したいと思ひます。ありがとうございました。

新会友に推薦されて

絵画・新会友 清水昌光(浦河)

推薦の第一報の電話が元漁業の友人から入り驚いております。入選受賞会友推薦まで走馬灯の様に思い出され、とても良い仲間と先輩と会員会友の皆様の暖かい激励指導のお陰と思ひ熱いものが身体中を駆け巡っています。推薦状と協会会則が届き3条、9条、10条の事項に協会



に何をお手伝い協力出来るのか身の引き締まる思いです。晴商雨描の限られた日曜祭日を体力勝負で制作し出品しています。こよなく愛する海に生きる人達をもう少し掘り下げて初心に還って精進したいと思います。

版画・新会友 浅川良美 (江別)

この春、娘の挑戦を応援してくれていた唯一の家族である母が、急逝した。自分の不誠実を思い出し、彫刻刀を握る手を止め、ため息をつく。これをしてやればよかった、あんな言葉をかけてやればよかった、などと後悔でバレンの皮が破ける。今まで、何度も何度も後悔を誤魔化してきた。(今回はこれでいいかあ)の甘えと、全道展に挑戦していた先輩達の言葉が言霊となって頭を廻る。『1ヶ月後、後悔したくないでしょ!』。人は人によって救われ、支えられ、希望を持てるのかもしれない。ありがとうございました。

版画 (銅版)・新会友 坂みち代 (札幌)

この度、会友に推薦して頂き大変光栄に思っております。今まで以上にしっかりと作品に取り組まなければと気持ちを新たにしているところです。作品に関しては、影と小さな子供をテーマに、幼児虐待、その反対に過度な甘やかし等の社会問題にもなっている事柄を念頭におきながら、これからも作品に向きあっていきたいと思っています。

彫刻・新会友 押上緋紗子 (釧路)

今回で出品の区切りにしようと思っていた矢先、会友推薦の知らせを聞きおもしろいやらぬことのでびっくりいたしました。永いこと続けて来たご褒美かなと思ひ頑張らなければと気持ちを新たにしました。会場にて二人の先生方に批評と的確なアドバイスを戴きとても勇気づけられました。ありがとうございました。これからは、もう少し骨太な作品が造れたらいいなと思っています。

彫刻・新会友 鈴木澄江 (奈井江)

このたび会友に推薦していただき、身が引き締まる思いです。

彫刻を学び始めた頃に、師より「彫刻の修練には忍耐が必要です。」と言われたことを思い出しています。

口を酸っぱくして熱心に教え続けてくれた師へ感謝すると共に、切磋琢磨し合った弟子仲間の存在が大きな励ましとなっていることを改めて痛感しています。

工芸・新会友 新関千裕 (小樽)

このたび、新会友に推薦いただき、大変うれしく光栄に思います。同時に、全道展の会友としての重みを感じております。

硝子工芸に出会い12年が経ちました。硝子の素材はそれ自体が美しく奥深く、とても魅力あるものです。私は、

これからもこの魅力ある素材を使い『表現』を追求していきたいと思っております。全道展の力強い営みに学びながら、制作を続けたいと思います。ありがとうございました。

絵画・新会員 菊地章子 (苫小牧)

私の初入選は第35回展で展示会場は近代美術館でした。小さい時から絵を描くことが大好きでした。女子美術大学の時は片岡珠子先生のご指導を受け先生の制作意欲が肌で感じ取れました。描く姿勢、熱い心、描けることの感謝、生涯描き続ける心構えなど教えて下さいました。

私はいままで、仕事を持ちながらコツコツと制作して来ました。これからも今までと変わらずマイペースで描いて行こうと思います。

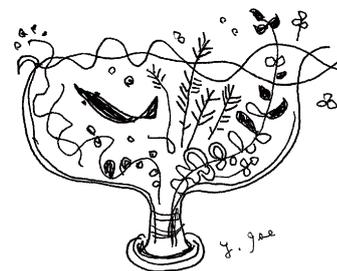
絵画・新会員 黒木孝子 (札幌)

第67回全道展で会員推挙という知らせを受けて身の引き締まる思いです。今まで多くの励ましをいただき心から感謝の気持ちでいっぱいです。これから先も精進いたします。

初めての給料の半分ほどで画材一式を買入し、古本屋で指導書を見つけてコツコツと、時々思いのままに油絵を始めた頃が懐しい。よく続けてこられたものです。これから先もあります。

絵画・新会員 佐藤仁敬 (札幌)

この度は会員推挙、誠に嬉しく感じております。こみ上げる喜びは、自身の作品が評価されたということよりも会の一員になって運営のお手伝いできるという喜びのほうが勝っています。道内の公募展において全道展は過去の出展作家の面々、歴史において優れていることは自明であり、いかにそのことを道内の美術ファンの方々に伝えて行けるか。私のできる力をフルに使って、そのことに着手したいと思っております。そして、20年、30年後も陳列時、展示作業を率先して行っている素敵な先生方、先輩方のような会員になれたらいいと思っています。for art for hokkaido! viva ZENDOUTEN!!



版画・新会員 阿南 ゆう子 (札幌)

この度は、新会員に推挙して頂きまして、身のひきしまる思いであります。ありがとうございます。

まだまだ未熟な私ですが、自然を愛し、人と人との絆を大切に、普通の生活が出来る毎日に感謝しながら品格のある作品を制作していきたいと思っております。

審査をして下さいました先生方本当にありがとうございました。

絵画 (会友賞) 小林 和子 (旭川)

会友賞を頂き、これまでに育てて頂いた全道展に感謝の念で一ぱいでございます。同時に10代の頃、函館杉並町の御自宅の前をゆったりと竹箒で掃いて居られた田辺三重松氏、兄弟と言う題の画の注文に応じて下さった岩船修三氏を思い出し、感慨一しおでございました。これからは天から降り注いでくる憩の靈気に包まれて、水辺の鳩の様に集い、休息し、語りあい、更なる深淵の里へと学びの旅を続けてまいりたいと願っております。

版画 (会友賞) 田口 丞二 (帯広)

今回、皆様に会友賞に選んでいただき、本当に有り難うございます。

全道展には最初油絵を出していましたが、なかなか入選出来ず落選をくり返しておりました。32回展から版画部門に変更してから入選することが出来、今日に至っております。まだまだ未熟な私ですが、木版画に対する表現の幅を広げ、試行錯誤し、新しい発見に出会いながら木版画づくりを楽しんでいきたいと思っております。



特集 全道展の今、そして未来

今、全道展は一つの岐路に立たされている！ こう感じているのは会員だけではないはずです。今回の特集は、〈全道展の今、そして未来〉と題し幾人かの会友に原稿を寄せてもらいました。全道展の中間に位置し、これから会員になるであろう会友の立場から全道展をどのように見ているのだろうか？

■全道展の今、そして未来

浅地 貴世子 (絵画)

今年も全道展を見た。思い返せば出品するようになった頃は、大好きな作品達と出会いドキドキ、ワクワクした。その作品の前で釘付けになった。まるで恋をしたかのような感覚。非日常の世界に誘われその空間の中でたくさん歩いて遊んだ。うれしかった。生きている絵に出会ったのである。さて今はどうだろうか。会場を一廻り二廻りして思う事は、描き続けて自分の絵を作るしか道はないのだ。いつも挑戦者でありたいと考えている。そんな事をぼんやり頭に留めながら市民ギャラリーを後にした。生き生きとした絵を自分が描けるようになりたいです。

■初夏の全道展

阿部 芳子 (版画)

地下鉄バスセンターの通路を歩き、地上に出ると花の香りがする。

大通り中央分離帯の大きな樹が白い花を咲かせているので、その香りと花卉が風に乗って届く。

全道展の会場へは真っ直ぐ行くと到着するのだが、緊張している自分を感じる。

私は何年ここを通ったのだろうか…。

小さかった子どもは成長し一人暮らしをするようになり、元気だった母は介護認定を受ける年齢となった。

そして今年、気づいたことがある。初夏の光景を見てきた私と同じように、この街路樹もまた全道展へ続く道を見ていた、ということ。

それぞれの思いを胸に、ここに行く人たち。私もその一人。来年もこの花の風に向かって私は歩きたい。

■今の自分とこれからの全道展について

岩谷 信昭 (版画)

版画を本格的に始めて14年の年月が立ち全道展2回の受賞をしました。1回目受賞道新賞時は飛び上がる程うれしく感じたことを思い出されます。何故ならば昭和39年に全国工業高等学校建築卒業設計コンクール(日本

建築学会)で金賞を受賞以来で…云々。何かと励みになります。素直に自分の思ったものを版画にと、心に決めた作品が受賞、会友推薦された結果だと思います。全道展を支えてこられた諸先輩が毎年の様に櫛の歯が1本1本と欠けていく、魅力的な作家が少なくなっていく。組織全道展さびしい限りである。何の職種でも組織は時間が過ぎ行くと弱体化する、又頑張ると活性化が出来る。全道展会員の審査する基準あるかと思えます。審査を厳しくした所で活性化が出来る問題ではないと思う。

近年老若男女コンピューター的感觉で、物の思考がオンオフで反射的な対応と処理のみが重要視され効率主義に束縛され人間の感性までがその中に入りつつ…。

今の風潮かも知れない。会員会友自身も今までのことをふり返って、自らの納得の行く作品をめざして、個々大地の水分と栄養を十分に吸収して大きく育ち、沢山の花実を付けて行けることを先人達は望んでいるかも知れない。

■全道展の今、そして未来

櫻井 純 (彫刻)

私が全道展に初出品したのは、今から10数年前。全道展なんて大きな公募展に出品できることでさえ、私にとっては大きな一歩だった。それが今では会友として全道展にお世話になっている。

会友になったとはいえ、諸先輩方との距離が縮んだわけではなく、今でも私はあの当時のままで、出品する度にドキドキしている。会場に展示してある自分の作品を見つけると、まるでひとりぼっちの空間で出口を見つけたような安心感、それと同時に「この会場にふさわしい作品を来年こそは作らなければ」という思いが同時にわき起こる。毎年同じ事を思うのだから、何も成長していないあとと思うのだが、他の作品の勢いや迫りに毎年圧倒されるのだから仕方ない。

私にとって全道展とは、いつまでも高い頂であってほしい。そして、これから続く後輩達にとってもそういう存在であってほしいと願っている。

■全道展への想い

佐々木 甲 二 (彫刻)

特別支援学校の教師として北海道へ渡り、16年が過ぎました。学生の頃、「卒業後は制作活動に没頭したい」という想いがあったものの、教師として、美術の楽しさ、創造することの喜びを伝え、ともに味わう道を選びました。それは、あわただしくも生徒たちからたくさんの刺激を受ける充実した毎日です。5年前から自らも制作活動を開始し、たくさんの芸術家が成す全道展に出品することを決めました。全道展を通じて、会員の先生方からご助言をいただき、また、多くの作家や来場者と意見を交わす場ができたことに心から感謝しています。まだまだ駆け出しで課題も山積みですが、まずはこつこつ地道に制作活動を続けつつ、全道展がこれからも魅力のあるものであるように、その一端を担うような存在となるように努力したいと考えます。

■全道展の今、そして未来

佐藤 説 庫 (絵画)

風薫る六月、毎年全道展がやって来る。

67回展は「39年ぶり最高賞なし」と云う事で、ちょっと驚きましたが「…なし」と判断されたこと、これはこれで良かったのではないかと思います。私は32回展から全道展に関わり始めましたが、その頃の作家集団と時間を経た現在の作家集団は少しずつ変化をして、紳士的になって来たように思います。今の全道展は技術的にも中央に近い作品が多くなり、レベルが高くなったと感じていますが、私としては当時の荒々しく熱気を帯びた空気が、ちょっぴり懐かしいのですが…。

今回、飾り付けの手伝いをしました。沢山の作品を選び、決定し、飾る事の労力を見て会員の皆様のご苦勞を強く感じました。

今後私達も積極的に参加することによって、全道展がより活気のあるものとなるのではないのでしょうか。

■全道展の今、そして未来

佐藤 弘 法 (絵画)

全道展ってすごい作家がいる。好きな絵がたくさんある。あの会員に絵を見てもらいたい…。大学時代から毎年欠かさず見に行った全道展に、自分も出品しようと重い腰を上げてから十五年になりました。実力の定まらない自分が会友って、本当にいいのだろうか？ 自分にしか描けない個性的な絵を！ 少しでも進化！ そんなことを考えて制作していますが、全道展の会場で見ると自分の絵は「個性がない、新しい試みは中途半端。」と思われられる。会員の先生方の迫力ある作品に圧倒され、自分はまだまだ未熟だと恥ずかしくなる。そして多くの出品者の作品から刺激を受け、「よーし来年こそは！」と気が入る。

会員の先生方のような個性と情熱を自分も受け継いでいきたい。全道展の素晴らしい歴史を大切にしながら、未来を盛り上げる一人として、これからも微力ですが努力していきたいと思っています。

■全道展の今、そして未来

高田 健 治 (絵画)

図録は本当に必要なのでしょうか。重くて場所もとり、費用も莫大です。なくてはならないものなのか大いに疑問です。それよりもZenの特集号として入賞、新会友会員の作品、連絡先等をモノクロで載せるほうがより身軽でいいのではないのでしょうか。図録は作品のデータのみ各地区に渡す程度でいいと思います。さらに全道展の審査を一番厳しかった時期のレベルまで戻して欲しいですね。やはり余裕のある展示スペースが必要でしょう。自分が気がかりなのは、会場を二段がけにしてまで詰めてしまうことに慣れてしまい、しだいにこれが普通なのだと思う感覚です。余裕のある展示こそが公募展の基本で、一点一点大切に展示されてこそ入選の重みも増してくるはずです。全道展が身軽になってみんながよりよくしてみようとする時に即実現できる体制があれば全道展の未来は明るいと思います。しかしそれができずに組織維持のルールに巻き込まれる時未来は危うくなるのではないのでしょうか。その鍵を握るのが予算の大きな部分を占める図録の存在であり、全道展の精神的柱である審査のあり方であると考えます。

■全道展の今、そして未来

鈴木 昭 (絵画)

今回の67回展から40年前の27回展が、自分のうれしかった初入選であった事を思い出した。画集を出して比較してみた。27回展の入選者、㊶112名、㊷42名。今回の67回展入選者、㊸79名、㊹183名であった。完全に男女の比率は逆転である。今の全道展は上手で分りやすい絵になっているのは、こんなところにも原因があるような気がする。又他の公募展と比較して写真をまともに拡大したような作品が少い。個性を大事にしているからであろう。そして未来の全道展を想像する時、どうしても文明の進みすぎが気になる。次から次とめずらしいものが発明されて、それに感動するよりもついてゆくのがやっとの現代人。いくら人間が操作したとしてもコンピューターやロボットの描いた作品の並ぶ全道展であってはならない。手造りの奥深い作品が並ぶ全道展であってほしい。

■全道展の今、そして未来

高橋 弘 道 (絵画)

故人となられた斉藤一明会員と全道展と道展の美の追求について議論する機会があり方向は同じではと問いま

したが全く違いますとの返事でした。今はある程度理解出来るようになりました。当時の全道展は個性的で強烈であり創立会員を始め、すでに鬼籍に入られた戸次正義さん（当時会友）と錚錚たる作家が名を連らねておりました。その頃の私は国鉄からJRへと移行の時で精神的に追い詰められていた時に、初入選で一つの光明が見え前向きに生きて行く事が出来ると思えました。そして昨年のあの3月11日毎日が何も出来ずの日々でしたが自分に克つを入れ制作する事が最良の道と考え会期までに出品する事が出来ました。昨年の作品は東日本大震災の被災者への鎮魂を込め青色で描きました。全道展は文化的にも社会に貢献する団体であり俊哲の作家群が聚遇している集団で個が集団を突き動かす思想を持つ全道展この様な前衛的な集団に係わって行く事が出来ればと考えています。

■全道展 今そして未来

内藤 満美 (彫刻)

たいへんお世話になっています。物づくりを苦痛と感じる人もいらっしゃるということをつい最近知りました。幸か不幸か私はどうやら物を作らずにはいられない人の様です。彫刻にかぎらず色々な物を作り、全体に共鳴しあってエネルギーに変化していると思えます。化学変化です。彫刻との出会いは大学生の時です。市民ギャラリーもなく、丸井デパートであったと思えます。陳列を学生アルバイトで手伝ったように記憶しています。あれから全道展もずいぶん変わったなあと思えますが世の中が変わっていくのだから当然です。思いを表現する人達がそれを持ちより、切磋琢磨したくさんの方々に見て頂き次につなげるということはこの上なく重要であると思えます。そして特に重要なことは、長年出品されていらっしゃる方のお声を聞き、勉強するということです。私にとって宝石の声です。陳列作品に対し最敬礼したくなります。力をふりしぼってがんばって参りましょう。



■「会友」私感

中村 得子 (版画)

大方の美術公募団体は、会員と一般出品者の間に中間的な会友などを置いています。私は全道展版画的会友となって五年になります。その間に制作の環境が変わり、体調に制約を受けるようになってしまいました。その様な変化をどう受け止めていくかは、人それぞれでしょう。

私は今年になって特に「会友」とは何だろうと考えてしまいました。団体の内でも外でもない周辺で、集団的意識に依りながら制作する。それを「友」と言うのは、成程面白いなあを思いました。そして、推薦して頂いた時のまま、与えられた場所というイメージしか「会友」に持っていない事を残念に思いました。それではいけないと思いました。

制作はどこまでも個人の仕事です。その仕事を友と評価してくれているのですから、ますます独創的でなければならず自由でなくてはなりません。追求していく意味は会友自身の願うところですし、団体としての会の目的にも適うことだと思います。

■私と全道展

西村 玲子 (版画)

私は学生の頃、油彩を制作しており、学生全道展に一度入選し、今井デパートに母と見に行った事がなつかしく想い出されます。

子育てのあい間に木版画を細々と制作していたのですが、心に刻むという様に板に彫っていると雑念を忘れ、満ち足りた時が流れます。しかし、思う様な作品が出来ず、低迷しており、描く、彫る、刷るの基本的な事が足りないのが明らかでした。

全道展に出品する事で自分を見つめる機会を与えていただいている事、また全道展を支えてこられた、先生方に感謝し、同展が長く繁栄して、いただきたいと切に思っております。

また自分自身に縛られることなく勇気を持って、楽しんで、制作していきたいとも思っています。

■全道展の今、そして未来

松木 眞智子 (絵画)

原稿依頼があり、会友の私には、大きすぎるテーマと思いつつ、考える機会とさせて頂きます。今年の第67回展会場に八木先生ご夫妻をはじめ、多くの会員の遺作が展示されていきました。長い間のひたむきな創作活動に感動すると共に、目標とすべき核が喪失していく不安と淋しさを感じました。ご冥福をお祈りするばかりです。

会報によると高齢化社会は、全道展にも反映し、会員の平均年齢は70才との事。静かに世代交替している今、会友の役割は重要に思います。展示作業、画集販売など運営をサポートするのは必然と認識しています。又、個々

の情熱を受け入れる団体としてのあり方も変化を求められているのではないのでしょうか？ 全道展のレベルアップはもちろんです、一方「芸術のもつ力」を社会に貢献できる様なかたちにできないものかと考えます。

美術館の枠を越えた展示・ワークショップ・国際交流 etc…。熱意と協力で未来は開かれると信じます。

■全道展と私

村 椿 富 子 (工芸)

全道展とは全くと言っていいほど縁がなかった私ですが、知人の誘いで何気なく始めたのが、陶芸との出会いでした。1998年に初めて全道展に出品し、14年が経過しました。全道展へ向けた作陶期間は、一年間で一番頑張る日と自分に言い聞かせて作品を作ってきました。楽しいことばかりではありませんが、出来上がった時の感動は、何事にも代えがたく嬉しいものです。まだまだ試行錯誤の毎日ですが、年に一度、全道展の先生や皆様にお会いし、意見を頂き、感動、刺激、創作意欲と元気をたくさん戴いております。今の自分にできることは、作陶を継続することです。全道展に足を運ばれる多くの方々に、多くの作品を見てもらい、一人でも多くの方々に興味を持って貰えればと思っています。益々、全道展が発展するように願っております。

■今の全道展、未来の全道展

星 エイ子 (絵画)

現在は少子化、高齢化、就職難、自然災害と先行く不安を抱え込み美術界全体にも微妙な影響を及ぼしていると思います。経済の収縮により各公募展の出品数、入場者数、図録の販売数は問題を抱え始めています。全道展では会員が次々と亡くなりましたが、それを補うべく若い力が台頭し活気づいています。各々の独自性を尊重し高度な質を求める全道展の精神は、諸先輩方から脈々と受けつがれ魅力ある会が続いて行くと確信しています。将来はもっと開かれた全道展を考える時が迫ってくるでしょう。公の美術館の様に展示するだけの美術展ではなく、展示と一般参加、小グッズ販売、子供の育成等多様な企画が必要になってくるのかもしれませんが。一人一人の芸術の質を高め作品の発表のみで存続するのが公募展の本来の姿だと思っています。高度な芸術を追求する集団、社会に必要とされる全道展を心から願っています。会友の立場ですが率直な意見を述べさせていただきます。

〈ありがとうございました〉

第46回のZenに「来年こそ」と題し原稿を寄せてくださった八木伸子さんが2月5日に逝去され、3月23日には八木保次さんが跡を追うようにこの世を去られました。生前、いつも二人一緒と言っておられた旅立ちでした。お別れ会が4月11日ロイトン札幌にて行なわれ、多くの方がお二人を忍び参列されました。御冥福をお祈り致します。



アトリエ訪問

石井千晶会員

第 67 回全道展が終わり、五日後の 6 月 30 日に洞爺湖畔東側の岩屋にある版画部門の石井千晶会員の自宅を訪れた。

この日の洞爺湖はおおむね晴れていて、とても気持ち良い日であった。洞爺公園洞爺線から山側に向かって進むのだが、山道を登っていくので途中家らしきものが見えなく、道を間違えたかと少し不安になりながらも進んでいくうちに視界が開けてきた。はるか向こうに別荘風の建物が二、三棟建っているのが見え、一番奥の家にスカンジナビアレッドの壁の建物を発見した時に、何故かそこが石井さんの自宅だと確信し車を進める。

道の突き当たりにあるこの家は、自宅を中心に向かって左側にアトリエ、右側にドームハウスがある。「間違いない」。そう思った時、石井さんが家のドアを開けて迎えてくれた。

ここは、遠くに洞爺湖を望め、町の喧騒とは無縁で野鳥と川のせせらぎの音が心に気持ちよく響いてくる。夜には満天の星空に覆われるであろう事が容易に想像できる。

石井さんは心象的な風景や形を白と黒のモノトーンで表現している。

「広島から、87 年に北海道に移り住み、生まれた子供がダウン症だったこともあり、自分でも気づかないうち、作品も変わってきたように思います。潜在意識の中らぎりぎり自分を追い詰めるように表出させていたようなものが、もっと宇宙的なもの、それは胎内の記憶の様なものでもあり、遙か遠い前世の記憶のようなものでもあり、それを繰り返せるかのような作業になっていきました。

私の版画には、下絵は無く、逆転する銅版に直に描き、腐蝕し、試し刷りをしては、更に描き足していくことを



繰り返しながらの作業。時に腐蝕による偶然の妙味もありつつ、腐蝕、反転のもどかしきもある作業。でもそれが故の面白さに惹かれての 40 年余りの歳月。北海道、そして洞爺と豊かな自然の中に住むうちに、「ここに、生かされている」という事を強く感じ、創るのではなく、生まれてきたという様な作品が出来たらいいなと思うようになってきています。昨年久々にやった作品展、ダウン症の娘、白井愛との二人展が不思議に心地良い空間でした。神様に近い魂の人、彼女とゆっくりの二人三脚、やっていきます。」

洞爺に来てからも、大きなプレス機と一緒に 4 度も転居し、8 年前にやっとこの場所に定住することが出来ましたと石井さんは言う。現在のお宅も、本来なら人を拒む場所であったらしいが、石井さんがこの場所に居住地として決めたときは、何もかもがすんなり決まったと話された時に、この地の主が彼女を呼んだのであろうと想像してしまった。石井さんとの会話の中での何気ない一言にも、とても強い愛のオーラのようなものを感じつつ、今回はこのような機会を得ることができとても暖かい気持ちになった。(2012.7.3 伊藤隆弘 記)

お便りコーナー

(絵画) 清水 昌光 (浦河)

今、日高管内浦河町は 14,000 人の人口の町ですが一寸した変化をしています。

町立の伏木田光夫美術館が開設されたのを期として 4 グループの美術団体の展示が活発になり今年は 23 年度公募展入選受賞作家 18 名の作品を初めて美術館に展示されました。常設は全館に約 80 点毎年 4 月掛け替えし全収蔵作品を一周に 4、5 年掛かります。24 年度企画展は 6 月 12 日～7 月 29 日までは常設室に伏木田氏の最近作 20 点を展示致します。

又最近特記される事は、市内中心街に共同生活の仲間が集まって、画廊喫茶にもなる店舗が出来、自活の道を築いて居ます。町内には他にも 2、3 店の画廊喫茶が開業し良い空間と交流の場を提供して居ます。

24.6.1 記

(絵画) 嵐 玲子 (札幌)

去る 9 月 29 日、中山峠森の美術館に行ってみました。透明な壁から緑の木々が見え、見事な美術館でした。飾られた作品が生き々して見えるのには驚きでした。この日、初雪が降ったそうです。 23.10.31 記

(24 年度の展示作品には多少変更があり、11 月以降の開館日は未定です。)

● 編集後記 ●

原稿のお願いに快諾ご協力ありがとうございました。無口で音も光も出ない全道展ですが、心の動きだけは大きくありたいですね。

庶務部編集担当 富田・伊勢・木滑 (文責)

第2回
全道展新鋭展

11月1日(木)～11月6日(火)

大同ギャラリー

札幌市中央区北3条西3丁目1
札幌大同生命ビル3・4階
011-241-8223

オープニングパーティー

11月1日(木) 18:00～

全道展 ホームページ

<http://www.zendouten.jp>

佐久間恭子遺作展

平成24年11月6日(火)～11月11日(日)

室蘭市民美術館

〒051-0016 室蘭市幸町6-23

0143-22-1124

主催：室蘭市民美術館を支える会(代表：小原)

第54回

学生美術全道展

10月6日(土)～10月9日(火)

※ 月曜日は祝日のため開館

札幌市民ギャラリー

授賞式・作品批評会 10月7日(日) 13時より

第68回 **全道展**

2013年6月12日(水)～23日(日)

授賞式・パーティー

2013年6月15日・18:00～ 全日空ホテル



第67回 全道展 札幌市民ギャラリー